

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
 【部門区分】第 2 部門第 6 区分
 【発行日】平成 17 年 7 月 14 日 (2005.7.14)

【公開番号】特開 2003-170951 (P2003-170951A)
 【公開日】平成 15 年 6 月 17 日 (2003.6.17)
 【出願番号】特願 2001-371960 (P2001-371960)
 【国際特許分類第 7 版】

B 6 5 D 47/06

B 6 5 D 47/12

B 6 5 D 51/22

【F I】

B 6 5 D 47/06 G

B 6 5 D 47/12

B 6 5 D 51/22

【手続補正書】

【提出日】平成 16 年 11 月 19 日 (2004.11.19)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】特許請求の範囲

【補正方法】変更

【補正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

容器口部に嵌合固定されるキャップ本体と、該キャップ本体に螺子係合により装着される上蓋とから成り、

前記キャップ本体は、筒状側壁と、該筒状側壁よりも小径の注出筒とを備え、該注出筒の下端部は、注出開口形成用スコアを備えた底壁によって閉じられており、前記注出筒は、前記筒状側壁の上端から内方に延びている水平フランジに連なっていると共に、該水平フランジの上面には、前記上蓋と螺子係合する螺条を有する環状突起が形成され、且つ該水平フランジの下面には、前記筒状側壁とは間隔をおいて下方に延びているインナーリングが形成されている複合容器蓋において、

前記注出筒の下端を閉じている底壁の下面には、前記注出開口形成用スコアよりも外側の位置に、前記インナーリングとは間隔をおいて下方に延びている回り止め用突起が、一定間隔で周状に複数形成されていることを特徴とする複合容器蓋。

【請求項 2】

前記キャップ本体の筒状側壁は、少なくとも一部が二重壁構造となっているか、或いは薄肉部を有している請求項 1 に記載の複合容器蓋。

【請求項 3】

前記回り止め用突起の先端が、中心部から周方向両側に向かって上方に傾斜したテーパ面となっている鋸歯状に形成されている請求項 1 または 2 に記載の複合容器蓋。

【請求項 4】

キャップ本体に上蓋を螺子係合させる際に用いるキャップ本体支持用の治具において、該治具の先端には、環状突起が設けられており、該環状突起には、上端から下方に延びている挿入用穴が一定間隔で複数形成されており、且つ隣り合う挿入用穴の間のそれぞれに回り止め作用部が形成されていると共に、前記挿入用穴に、キャップ本体の内側に形成されている複数の回り止め用突起を挿入して、該回り止め用突起と回り止め作用部とが係合することによりキャップ本体の回転が阻止され、この状態で上蓋の螺子係合が行なわれることを特徴とする治具。

【請求項 5】

前記回り止め作用部の上端面は、その中心部から周方向両側に向かって下方に傾斜したテーパ面となっている請求項 4 に記載の治具。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0009

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0009】

【課題を解決するための手段】

本発明によれば、容器口部に嵌合固定されるキャップ本体と、該キャップ本体に螺子係合により装着される上蓋とから成り、

前記キャップ本体は、筒状側壁と、該筒状側壁よりも小径の注出筒とを備え、該注出筒の下端部は、注出開口形成用スコアを備えた底壁によって閉じられており、前記注出筒は、前記筒状側壁の上端から内方に延びている水平フランジに連なっていると共に、該水平フランジの上面には、前記上蓋と螺子係合する螺条を有する環状突起が形成され、且つ該水平フランジの下面には、前記筒状側壁とは間隔をおいて下方に延びているインナーリングが形成されている複合容器蓋において、

前記注出筒の下端を閉じている底壁の下面には、前記注出開口形成用スコアよりも外側の位置に、前記インナーリングとは間隔をおいて下方に延びている回り止め用突起が、一定間隔で周状に複数形成されていることを特徴とする複合容器蓋が提供される。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0010

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0010】

本発明においては、キャップ本体の筒状側壁の内側に位置している注出筒の底壁下面に、好ましくは先端が鋸歯状となっている突起（以下、単に鋸歯状突起と呼ぶ）を複数設けたことが重要な特徴である。即ち、これらの鋸歯状突起は、回り止めとして機能するものであり、注出開口形成用スコアの外側に、一定間隔で周状に配置されている。これら鋸歯状突起と係合する部分を有する形状の治具を用いて、キャップ本体を回転不能に保持しながら上蓋のキャップ本体へのセッティングを行なうわけであるが、鋸歯状突起と治具との係合によりキャップ本体の回転が阻止されるため、上蓋のセッティングの際に、キャップ本体の筒状側壁には負荷がかからない。従って、キャップ本体の筒状側壁が、二重壁構造となっている場合においても、筒状側壁を変形することなく、高い締め付けトルクで上蓋のキャッピングを行なうことができる。また、上記の鋸歯状突起は、一定間隔で周状に配置されているため、この鋸歯状突起とキャップ本体のインナーリングとの間に、内容液が溜まるような空間は形成されず、この鋸歯状突起によって、内容液の注ぎ出しが損なわれることはない。さらに、これらの突起は、先端が鋸歯状となっているため、治具をキャップ本体内に挿入すると、鋸歯状突起が治具の係合部に容易に誘導され、治具の位置決め機構を容易に行なうことができる。